

## 第 73 話〈解散〉の要約と参考資料

### 第 73 話〈解散〉の要約

亜ヒ酸鉱山を解散したあと、佐伯に帰った川田平三郎さんは胸の病気で亡くなりました。亜ヒ酸精製の技術者野村弥三郎さんも、佐伯で胸の病気で亡くなりました。記念写真に写った経営者、技術者、労働者約 50 人は、鉱山で押されたヒ素の烙印を共有していたのです。

### 第 73 話〈解散〉の参考資料

#### 7 3 - 1 鉱山師から新興財閥へ

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」より

採鉱の責任者として亜砒鉱山を支えた喜右衛門さんの死は、鉱山師から新興財閥の中島へ、外録鉱山が移りゆく時代を象徴しちよった。(P125)

「かな山」より一段低い川べりで、トンカントンカン鉱員長屋の建設が始まった。常義さんや袈裟蔵さんたちが、大工として松尾一男に雇われちよっての。材木は「南」の三蔵さんが官山から伐り出した。川田時代の萱葺の掘立小屋と違って、中島時代の長屋はトタン屋根のぬき家じゃ。熊本や大分からも鉱夫が来るというんで、「かな山」のまわりに新しい長屋が 3 棟、4 棟と建っていった。(P132)

#### 佐藤光さんの話 (1979 年 11 月 6 日)

中学校を 3 年で中退して、川田時代に 3 番坑の富高暁さんの手子として 40 銭から 60 銭で働いた。あまりに安いんで、「小又」の小笠原貞利君らと 3 人で尾平鉱山に行って働いた。1 日に 1 円 30 銭だった。中島が土呂久鉱山を買うたんで、長うせず呼び返された。それが昭和 8 年 8 月 1 日。そのあと入隊まで (11 年 1 月) 働いた。

#### 7 3 - 2 昭和 8 年の記念写真

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P133 より

川田は解散の日が近づくと、約 40 人の従業員と記念写真を撮った。坊主刈り、ちょび髭、背広に下駄履きの川田が、最前列の中央に坐った。右隣に芸者あがりの夫人、その隣に野村カタ、弥三郎の夫婦、鉱夫頭の丸岡袈裟治、学生服姿の野村勉、川田の左隣は中島に鉱業権を売り渡した竹内勲、川田の甥の堀江武雄。その右から後列にかけて、亜砒焼き、採鉱、鉱石運搬、<sup>だんご</sup>団鉱づくりに従事した連中がずらり並んだ。(P133)

大正 9 年 6 月に宮城正一の始めた亜砒鉱山は、昭和 8 年 8 月中島財閥の手で錫鉱山へ切替えられた。川田と野村さんはやがて佐伯に引揚ぐる。従業員はそのまま中島に引継が

れた。(P134)

佐藤仲治さんの話（聴取日不詳）

松尾は関口の鉱区で掘った。川田は竹内の鉱区を借りていた。松尾が中島のために買収した。中島がやりだしたとき、「錫だけで亜ヒはやめるじゃろう」と村の人はいいよった。昭和 8 年、川田が中島に売山した。これが最後なので記念写真を撮ろうということになった。ここに写っている職員はみな、中島に引き継がれた。

堀江武雄さんの話（1973年8月11日聴取）

堀江さん所有の記念写真の裏のメモ

昭和8年8月1日

三つの道に立ったかへ

わからない波よ風よ

行く處までいけ

ままよ時節よ秋風よ

悩む淋しく又悩む

明治40年8月生まれだからそのとき26歳くらい。兄弟はないし、どこへ行けばよいのか、鳴るようになれ、鳴釜真夜、東京へ帰りたくはなし、と自暴自棄の気持ちを詠んでいる。これは解放ではなく、これからまた働いた。川田は堀江が東京に帰った昭和10年以降も土呂久にいた。

（川原の考え）三つの道とは、東京へ帰る、川田とともに去る、土呂久に残る、と単純に考えられないこともない。

73-3 佐伯の川田平三郎さん

堀江武雄さんの話（1973年8月11日聴取）

川田は結核で佐伯で死んだ。後妻は、川田が死ぬ前に、佐伯に家を建てさせた。死んだあと、この家を売って、大阪の池田市に土地を買って、娘に婿を取った。佐伯の屋敷はすごいものでした。それを売り飛ばして、財産を独り占めした。私に背広の上一着を私に形見にくれた。それだけですよ。

（\*50-2の一部）

73-4 御手洗禱一著「大佐伯」（昭和4年4月3日発行）

鉱業

苦木に亜砒酸製造工場があつて、大野郡木浦鉱山で採掘した粗製の砒素を精製してゐ

るが大正7,8年ごろは年額30万円以上に達し鉱業の黄金時代を現出してゐたものだが、亜硫酸の市価低落によって近來は不振つづきで、しかも大部分は木浦において精製出来るやうな設備となつたため苦木に出る品は1ヶ年1千箱内外、この価額が現在の時価で6千余円である。此の外鉱産物としては若干の満俺が出るばかりで他には殆んど特記するものがない。

#### 広告

薬品一式	
食料品	こめや薬店
ゴム製品	野村 勉
衛生材料	大分県佐伯町
工業薬品	電話 139番
染料	
◇吸入酸素特約店	

#### 73-5 亜ヒ焼き労働者の無念

佐藤イワ子さんの話（1972年2月20日聴取）

徳蔵さんが亡くなったのは、私が小学校5年生（11歳、昭和14年ごろ）のとき。病氣は老衰ちゆうことやったけど、61か62で、そげん年いっとったわけじゃねえ。鉱山にはどのくらい行つとったもんか、個人の家借りて夫婦でおった。私が小学校3年のころ（昭和12年、東岸寺に）帰つてきて、1,2年おつてから死んだ。だんごまるめて亜ヒ焼きたい。いちばんいかん仕事をやりよつた。医者にかかつたとき、「ぜん息」ち言われたごとあつた。ぜん息のまま、内臓はなかつたが、ゼゴゼゴいうて咳が出てくる。

シカノさんは終戦になつた年じゃけ、20年の10月、73歳くらいと思う。私が18歳のとき、ばばさんが死んだ。鉱山で夫婦いっしょに亜ヒを焼き、だんごつくつた。ぜん息がでて、全身がまんまるう腫れて、へそも腫れて、腫れたまま。養生のしようもなかつた。えらい苦しみして死なしたもんたい。「ぜん息、ぜん息」ち、わからんちや、田舎の医者には。まちつと早うなんとかなつとれば。医者が言う通りして。

アキノさんも、私が学校行くころ、じいさん、ばばさんと一緒に通うた。亜ヒ焼きの仕事。4年前、63歳で、心臓が悪いとか、胃下垂とか、ぜん息の気が出て、痰に血がついて……死んだ。おっかさんの咳が激しかつたとき、あんまり激しゅうしよると血をはきよつた。

みんな亜ヒ焼き行つて、亜ヒをこねて、だんごつくつて焼きよらした。日役がちと高かつたから、それに迷らせて行つたっちゃな。孫、子を太らせるために行つたちゃろと思うちゃがな。一日、今にすれば何百円か違うっちゃろな。それで無理したっちゃがな。

シカノの妹エツ（佐藤繁太郎の嫁）も、シカノさんと同じころだんごつくりに行きよった。病気ということで、早うやめた（昭和13年ごろ）。エツはシカノより4つくらい年下。

（\*54-1と重複）